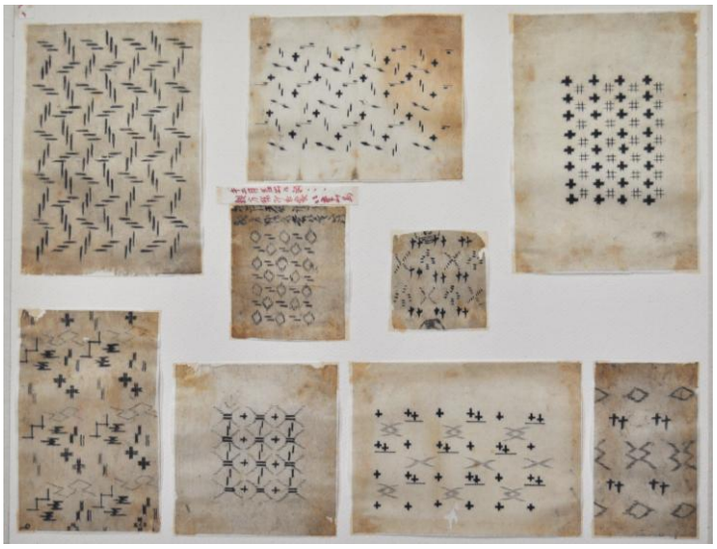
有形文化財
【歴史資料・工芸】
※二重指定

## 御絵図（みえず）

指定年月日／2013（平成25）年３月22日
所　在　地／登野城４－１（八重山博物館）



この御絵図は、重要無形文化財「型絵染」保持者の鎌倉芳太郎氏（本市名誉市民）が、1978（昭和53）年に八重山博物館へ寄贈したものである。大正から昭和にかけて美術工芸調査で沖縄を訪れた際に収集したもので、「八重山上布絵図」と「伊江王子御免銀御絵図」からなる。

御絵図とは貢納布を織るための図案で、王府の絵師が貝摺奉行所で描いたとされる。貢納布には、定納布と特別注文品の御用布があり、御絵図は御用布を織る際に手形（注文書）に添えられた図面で、手形が届くと蔵元の御用布筆者により写し取られ、村々の役人に渡された後、織女へ割り付けられた。また、織り上がりの模様と照らし合わせて検査する役目も持っていたようである。

「八重山上布絵図」は31点の絵図、「伊江王子御免銀御絵図」は15点の絵図からなり、和紙に墨で絣模様や縞模様を描いたものや、地色を植物染料や墨で染め、顔料や墨で織り上がりの絣模様や縞模様を描いたものがある。御絵図帳は戦前10冊あったことが確認されているが、この御絵図がその一部か、あるいは別のものなのかは明らかでない。八重山のみならず琉球王国時代の御用布を知るうえで貴重な資料である。

市指定

有形文化財
【考古資料】

## 崎枝赤崎貝塚出土開元通宝（さきえだあかさきかいづかしゅつどかいげんつうほう）

指定年月日／1991（平成３）年11月13日　所在地／美崎町16－６（石垣市教育委員会）

崎枝赤崎貝塚は、屋良部半島東南の岬、赤崎の低砂丘上に形成されている。1985（昭和60）年と1986（同61）年に市教育委員会によって発掘調査が行われた。その結果、この貝塚が土器の出土を伴わない無土器期の遺跡であることが確認された。貝塚からは石斧、すり石、シャコガイ製貝斧、スイジガイ製利器などが出土したが、この貝塚が特に注目を集めたのが、33枚もの銭貨「開元通宝」が出土し、そのうち27枚がまとまって見つかったことである。開元通宝は、621年に初鋳された銅貨で、唐時代（７～10世紀）の中国や東アジアで広く流通した銭貨である。崎枝赤崎貝塚の発掘調査によって、無土器期にも外の世界との接触があったことが明らかになった。

開元通宝の出土は、琉球列島各地で多く見られるが、同時期に日本で鋳造された銭貨と一緒に見つかることはない。また、本土では官庁跡や社寺、墓で見つかることが多いが、県内では一般集落跡で出土し、その量も多い。このことから、開元通宝が中国との直接的な交易によって崎枝赤崎貝塚を含め、琉球列島各地にもたらされたと考えられる。